

猫を助けた
浦島太郎
高野敦志



目次

猫を助けた浦島太郎
あとがき

猫を助けた浦島太郎

大学院生の太郎は、母の玉枝たまえとともに動物愛護センターにや
つて来た。檻おりの中には猫が数匹かずぱいずつ、路上で保護されたり、飼
育を放棄されたりして収容されていた。

茶トラの子猫は前足を差し出し、構ってくれとアピールして
いる。黒い子猫はあどけない目で、檻の端から訴えかけている。
「この中から一匹選ぶのって残酷ね。選ばなければ、生き残
ることができないんだから」

玉枝は母親らしいまなざしを、保護猫たちに注いでいる。春
学期になれば、一日の大半実験室にこもる太郎は、留守番する
母の慰めになればと、猫を引き取ることを提案したのだった。

母一人子一人の暮らして、家には父親がいなかった。どうし
ていないのかは、何となく分かっていたのだが。ここにいる猫
たちも、似たような境遇にあるとしか思えない。

「母さん、奥にいる真っ白い猫はどうだろう？」

太郎は神経質めずねこそうな牝猫めねこが、自分を見つめているのが気にな
っていた。振り返ると、母は愛嬌あいきょうを振りまいてる茶トラの子
に、心引かれてる様子だった。

「あなたが白い子の方がいいって言うなら、それでもいいわ」
母が不本意ながら同意したのが、引っかかったのだが。譲渡
が決まると、誓約書を書かされた。室内飼いで避妊手術を受け、
死ぬまで愛情を持って飼うことが条件だった。

太郎は牝猫にマイという名前をつけた。猫用のトイレや爪と

ぎ用のダンボールも、早速買って来た。ただ、猫は居間の隅にばかりいて、固形の飼料をやっても、口にしようとしな^い。鯉^{かつお}や笹身^{ささみ}の餌でなければ食べなかつた。

「本当に贅沢^{ぜいたく}なんだから。自分をお嬢さまでも思っているのかしら」

マイを抱き上げようとすると、シャーシャーと威嚇^{いかく}の声を出した。一向に懐^{なつ}かない牝猫に、母は軽い苛立^{いらだ}ちを覚えていた様子だつた。太郎が頭をなでると、うつとりしたように目を細める。

半年が過ぎた頃、母は避妊の手術をす^{ると}言い出した。これは引き取るとき^の条件だつたのだが、太郎はマイの体にメスを入れるのが忍びなかつた。

「部屋の中で飼ってるんだから、いいじゃないか」

「発情期が来たら、大きな声で鳴く^{って}言う^うじゃない？ 妊娠でもしたらどうするの」

母は動物病院に予約してしまつた。前日から絶食させて、水も飲ませよう^としない。当日の朝、居間の出窓を開けて、空気交換をしたのだが、網戸をきちんと閉めなかつたらしい。

「猫が逃げちゃつた！」

母の叫び声に、太郎は叩^{たた}き起こされた。だから、言つたじゃないか。おろおろするばかりの母を怒鳴りつけ、パジャマのまま庭に出たのだが、マイの姿は見当たらなかつた。

太郎は食事^もろくに^とらずに、自宅の周辺を探し回つた。戻つてくるかもしれないからと、蚊が入るとい^う反対を押し切つ

て、玄関を開けっぱなしにした。

日が暮れてもマイは見つからなかった。半袖では涼しくなり、庭では鈴虫が鳴き出した。どこに行ってしまったんだろう。東の空からは満月が昇ってきた。夕食の支度したくができたという母の声にも耳を貸さず、白い光を放つ月に向かっていた。

「あんな所に明るい星が！」

眺めるうちに、星だと思った光は、横に移動して止まり、すうっと真下に降りてきた。と見る間に大きくなって、こちらに迫ってくる。

「まさかUFOか？」

逃げようとしたが、体が麻痺まひして動かない。気がつくくと、太郎の足は地面を離れ、白い光に吸い上げられていった。眼下で

は街の明かりがともり、車のヘッドライトが動いている。そのまま浮遊している飛行体に、連れ込まれてしまった。

円盤型の機体には、全身に白い毛が生えた宇宙人が乗っていた。可愛らしい目玉にちっちゃな鼻、大きな口の左右には長いひげが伸びている。

「私はやまねこ座からやって来た宇宙人です。こちらでは驚かれないように、猫の姿をしています。故郷では人間と同じように、二足で歩行しています」

もの柔らかな物腰の猫女は、ニャーニャー鳴いているようだったが、太郎には何を言っているのか分かった。

「君はもしかして、マイなの？」

「そう呼んでましたね。保健所の人に捕まってしまい、危あやうい

ところを助けていただきました。ただ、避妊させられると知って逃げ出し、宇宙船で戻ろうとしたとき、太郎さんをお見かけたので、お礼に故郷に招待しようと思っただけです」

事情は分かっただけのもの、今起きていることが信じられない。機体は音もなく上昇を始めた。海の方に進んでいくと、横浜のベイブリッジやランドマークタワー、東京湾を航行する船の明かりが見えた。加速していくと、本州の輪郭が光の点で確かめられた。太平洋は島を除けば暗く、どこまでも平らだった。今まで見たこともないほどの、無数の星がまたたいていた。

月は眼下で白い光を放ち、周囲の雲を照らしていた。さらに上昇すると、太陽と月が昼と夜を分担して、下界を照らしているのではないか。雪の壁に囲まれたクレーターでは、中心の北極

付近に穴があき、呼吸するかのように、口を広げたりつぼめたりしている。そのたびに、地中からプラズマの光が噴き出して、ドーム内側に緑がかかったオーロラが流れ出していく。

「いったい、これは！」

太郎は言葉を失っていた。メタバースの研究をしているので、天動説のモデルを仮想現実の形で見せられているのかと思っ

た。
「さあ、これからワープしますよ」

マイの指さす先には、暗黒の穴が開いていた。呑み込まれた途端、意識はとだえた。どれくらいの間が流れたのか。眼下には地球そっくりの惑星が見えていた。海が広がって白波が立ち、無数の鳥に似た動物が、水面すれすれを飛んでいる。

やがて陸地が見えてきた。港には船が出入りしている。鉄道も縦横に走っている。ここは地球のどこかなのだろうか。ただ、真下を歩いているのは、猫の顔をした宇宙人で、豊かな毛皮をまとっているため、衣服を着る必要がないらしい。

内陸に移動していくと、高層ビルが建ち並ぶ都市の中心には、堀に囲まれた緑地が見え、瓦屋根に覆われた東洋風の王宮が建っていた。前庭に機体はゆっくり降下していった。

猫の軍楽隊が行進曲を演奏し、多くの臣下が参列する中、中央に敷かれた絨毯には、王冠をかぶった猫の女王と、王配らしい猫男が並んでいた。マイとともに降り立った太郎は、拍手とともに絶大な歓迎を受けた。

「あなたは娘を助けてくださった命の恩人です。どうかこの子

と結ばれて、私たちの後継者となっていたきたい」

女王のお言葉に、太郎は当惑するばかりだったが、王宮の内では結婚式の準備がなされていた。盛大な儀式に花婿として迎えられるのは、晴れがましいことではあったが。

「早くお召し替えをなさって！」

マイの夫として迎えられるために、太郎は着ぐるみをまとわなければならなかった。猫男の姿でなければ、この国の王女の配偶者としてふさわしくないからだだった。

結婚式では神主の祝詞とお祓いの後、三三九度として、マタタビで作った酒を酌み交わし、お互いの頭を毛繕いした。披露宴で供されたのは、日本料理のコースのようだった。笹身に似た肉の寿司、野菜と肉の天麩羅、鋤焼きの肉は薄切りにし

てあり、軽く火を通すだけで食べられる。

「お気に召して？ 鼠料理のフルコースは」

マイの言葉に一瞬、息が止まりそうになった。猫の姿にされた上に、鼠まで食べさせられるとは。さりとて、こんなにおいしいのなら、毛嫌いするのはおかしい。鼠といつても、遣伝子組み換え技術で、牛のように巨大化した鼠なので、肉の部位によってさまざまな料理の素材となるらしい。

参列者を楽しませるために、種々の出し物が用意されていた。この国では武道が尊ばれており、男女別の柔道やボクシング、美しく刺繍された蹴鞠を奪い合う、サッカーに似た球技にも心躍らされた。扇子を使った伝統的な舞踊には、マイも踊り手として参加した。娘の晴れやかな姿に、女王陛下は目に涙を

浮かべられた。

最後は一同起立して、国歌斉唱の段となった。軍楽隊の演奏に合わせて、猫の男女が歌ったのだが、普通に話す分には分かる言葉も、メロディーを伴うとニヤーニヤーとしか聞こえなかった。

その夜、風呂に入るときに、ようやく着ぐるみを脱ぐことができたが、寝室に戻る前には、猫の姿に戻らなければならなかった。襖の向こうには、護衛の猫男が控えており、人間の姿を見られて猜疑心を抱かれては、という配慮からだった。

座敷に並べられた蒲団に入ると、マイが体を絡ませてきた。ふさふさとした白い毛並みが擦れ合うと、今まで感じたことのない感触に、鳥肌が立つほどの快楽を覚えた。眠られぬ夜は果

てしなく続いた。

王族の一人となった太郎は、特に仕事を与えられなかった。本が読みたくなかったが、この国の言葉には文字がなかった。暇を持って余したので、臣下と柔道をしようとしたが、王女の婿を相手に本気を出す者はいなかった。王族というものは、金殿きんでんと玉楼ぎよくろうという籠に閉じこめられた小鳥のようなものだと感じた。俄然がぜんとして、太郎は望郷の思いに駆られた。母はどうしているだろう。夕食もとらずに姿を消した自分を、捜し回っているに違いない。どれだけ嘆き悲しみ、生きた心地のしない日々を送っていることか。一日も早く猫の宇宙人が住む星を去って、母と暮らしていた家に戻してもらおう！

太郎は着ぐるみを脱ぎ捨てると、王宮の中を闊歩かつぽしていった。

豹変ひょうへんした姿に臣下は呆然ほうぜんと立ち尽くした。そのとき、マイは女王や王配とともに、マタタビのお茶を飲んでいた。突然の帰国願いに、女王と王配は驚愕きょうがくするばかりだった。マイは一瞬、顔を引きつらせたが、「お母さんに会いたいと言うのなら、無理にお引き留めはできませんわね」と、押し殺したような声で答えた。

ただちに出立しゅつたつする準備がなされた。帰路もマイが宇宙船で、太郎を送り届けることになった。王宮に配属された者たちは、無言のまま突然の帰国を見送った。行きとは反対の行程をたどり、途中でワープした機体は、日本上空に達すると、懐かしい故郷を目指して下降していった。

別れ際にマイは、螺鈿らでんで装飾された小箱を太郎に渡した。今

生の別れになると思うと、去りがたい思いに駆られたが、マイの方では吹っ切れたように、涙一つ流さなかった。

「この箱を私だと思つて！ 決して開けてはいけません」

太郎は箱を抱えて、宇宙船の中央に立った。床が左右に開くと、白い光に包まれ地上に降りていった。すでに太陽は西に傾き、鴉が夕空で鳴き交わっていた。初秋の頃なのか、半袖ではうすら寒いほどだった。

下ろされた場所は、なだらかな丘が続くばかりだった。家の礎石やコンクリートの枠組は残っていたが、人が生活している気配はない。母と暮らした家はどこだったんだろう。ただ、草の生い茂る道路や地形から、かつて住んでいた町だということには分かったのだが。これは悪い夢だと思えない。仮想現実

だとしても、ちよつと度が過ぎるんじゃないか。さまよつている間に、あたりは薄暗くなってきた。

「お母さん！」

太郎は子供に返つたように泣き声を上げた。猫の星で埒もない生活を送るうちに、地上では途轍もない時間が流れてしまつたらしい。その間に何があつたんだろう。核戦争かパンデミックか。とぼとぼと歩くうちに、太郎は墓地の中に迷い込んでいた。足もとで鈴虫が鳴いている。正面の苔むした石には「浦島家之墓」という文字が読み取れた。傍らの墓碑には母の玉枝とともに、太郎自身の名前も刻まれていた。

「僕は死んでいたのか。それとも、行方不明のまま、死んだものとして弔つてもらつたのか」

いつから夢を見ていたんだろう。太郎は地べたに座り込んでしまった。もはや生きた心地もせずに、マイから渡された箱に手をかけた。これを開ければ、幻覚を引き起こすガスでも出てくるんだろう。「夢のまた夢」なら現実に戻れるかもしれない。小箱の紐を解くと、白い煙が出てきて、太郎は青年の姿のまま、フリーズドライにされていった。みずみずしい肌を保ちながら、木乃伊^{ミイラ}に変わっていったのだ。

ほどなくして、マイの乗った宇宙船が戻ってきた。横たわった太郎の体を、白い光で機内に引き上げていった。もはや冷たくなった肌に触れると、猫女は腕の中で温めるように抱きしめた。

「ここに帰ってきたら、あなたが死ぬのは分かっていた。今頃

はお母さんの魂を捜しているのね。私は永遠に若いあなたの肉体を、愛し続けることができるわ」

あとがき

二次創作とは何か。原作をもとにして、物語を発展させたり、時代や設定を変更したりするものと思っていた。原作に著作権が残っている場合、盗作になりかねないものだ。ただ、これでは原作が劣化したものにしかならない。

そこで、物語の大筋は残して、作品のテーマを変えて書いてみることにした。それがこの「猫を助けた浦島太郎」である。設定を現代に変えて、助けた動物を亀から猫に変えたらどうなるか。乗り物が亀ではなくUFOだったら。ただ、話の大筋を変えなかったために、二次創作としては冒険が足りなかったのかもしれない。文学的に価値があるものとするには、設定もテ

ーマも変えて、一見すると二次創作には見えないほど、独自の世界を創らなければならないのかもしれない。

なお、この作品の浦島太郎は、数百年後に自宅跡に戻り、自身と母の墓を発見して絶望し、玉手箱を開けることになるのだが、書き終えてから一月後、僕は老衰で母を亡くした。「今頃はお母さんの魂を捜しているのね」という言葉が現実になってしまい、奇妙な符合のようなものを感じた。その点では、アンビバレントな思いを抱かずにはいられない。

二〇二三年六月十五日

高野敦志